

【草花の部屋】

ワレモコウ（バラ科ワレモコウ属 *Sanguisorba officinalis*）

和名：ワレモコウ（吾亦紅、吾木香、吾妹紅） 別名：サングイソルバ 他

英名：great burnet

バラ目 多年草

原産地：北米

花言葉：変化、愛慕

花色：赤、紫、赤茶色



← 写真-1 ワレモコウ

撮影日：2013 年 7 月 12 日

撮影場所：グアルダ(スイス)にて

撮影者：M さん

↓ 写真-2 ワレモコウの葉

撮影日：2013 年 7 月 12 日

撮影場所：グアルダ(スイス)にて

撮影者：M さん



← 写真-3 ワレモコウの花

撮影日：2013 年 7 月 12 日

撮影場所：グアルダ(スイス)にて

撮影者：M さん



オーストリアのドナウ川へと続く、スイス南東部を流れるイン川の両岸にはアルプスの山並みのほか、澄んだ湖や牛が草を食む高原が広がります。イン川の北側一帯のエリアはウンターエンガディン地方と呼ばれ、そのなかにある美しい小さなグルダ村(標高 1633m)を訪れた道端に咲いていました。

源氏物語や徒然草にも登場する古い名称で、秋の侘しさを象徴する植物として、秋の季語として数多くの俳句に謳われているそうです。漢字表記では吾亦紅、吾木香、我妹紅、我毛紅、我毛香など様々に書かれてきたそうですが、「～もまた」を意味する「亦」を「も」と読み、「吾亦紅」と書くのが現代では一般的そうです。「吾木香」については、キク科の植物で線香の原料にもなるモッコウ(木香)と似た香りを連想することから、「わが国の木香」という意味だともいわれているそうですが、実際にはワレモコウからあまり香りはしないようです。名の由来には諸説あり、はっきりしていないのが現状のようです

葉は小さな葉が複数集まった羽根状で根から直接生じるのが大きな特徴です。一つ一つの葉は細長い楕円形で、縁には鋸歯があって羽根状になり、冬には地上部は枯れます。葉の縁に細くきれいな白い斑が入るものや、黄色い小さな斑点が散る斑入りがあるそうです。

花は晩夏から秋にかけて茎を伸ばし、細かく分枝したその枝先に円筒状の穂状花序ができ、暗紅紫色の花弁のない可憐な花を密につけます。4枚の萼と4個の蕊があり、雌蕊は小頭状です。開花時は萼も桃色で黒い葯が目立ち、穂(花序)の上部から咲き始め、次第に下に移っていきます。ワレモコウの円筒状の楕円形の花序は、小さな花が沢山集まって形作られていて、その一つ一つの花は、花弁がない代わりに4枚の萼片が色づいています。ハナバチなどの昆虫を呼び寄せて花粉を運ばせる虫媒花です。

日本では雑草として扱われることが多いワレモコウですが、古くから生薬として用いられてきた薬草だそうです。生薬としての名前は「地榆(チユ)」といい、ワレモコウの根茎を天日干しにして作ります。抗菌作用や収れん作用があるとされ、おもに止血や抗炎症薬として用いられていたそうです。